

---

2019年

# 9月の普及活動状況

---

## ダイジェスト版

～県下10農林事務所農業普及課と農業経営課(農業革新支援センター)の取組～



岐阜県農政部農業経営課

### 多様な担い手づくり

#### 岐阜農林■スマート農業 第3回コンソーシアム会議を開催

(農)巣南営農組合では、本年度から県をはじめ関係機関等とともに国のスマート農業実証プロジェクトに取り組んでいる。

9月9日には、輸出用米の収穫開始を前に第3回コンソーシアム会議が開催され、(農)巣南営農組合のほか関係機関、農機メーカー、助言・指導を行う農研機構研究員など24名が出席してこれまでの経過など中間検討を行った。

会議では、農業普及課からスマート農機の稼働実績、水稻の生育経過について報告を行い、組合からは農業機械ごとに異なるGPS基地局設置に手間がかかることなどが問題提起された。

今後、農業普及課では、ロボットコンバインを用いた収穫作業などスマート農業実証ほの生産費や作業性等について分析を進めていく。



【コンソーシアム会議】

#### 郡上農林■労働力確保 新農業人フェアにて出展支援

たかす園芸生産協議会は9月8日、東京での新農業人フェアに出展し、農業法人等での雇用就農希望者の募集活動を行った。

設置ブースでは、協議会メンバーが郡上地域のPRや受け入れ体制、雇用条件などを説明し、フェアに同行した農業普及課も、積極的に助言や呼び込みの支援を行った。

この日、協議会ブースに来てくれたのは11名。希望する品目や条件等は様々だったが、どの人も興味を持って、メモを取りつつ熱心に耳を傾けていた。

たかす園芸生産協議会では、今後も各種イベントに出展し、生産者の労働力確保に向けて活動を続けていく予定としており、農業普及課も引き続き支援を行っていく。



【説明を聞く参加者】

#### 恵那農林■夏秋トマト 新規栽培者の確保に向けた取り組み

東美濃夏秋トマト生産協議会では、新規栽培者育成のための研修農場を管内に4カ所設置しており、次年度の研修生確保のための紹介ポスターやパンフレットを各所に配布するとともに、各地の農業フェア等に出展し募集活動を行っている。今年度は2組の研修応募があり、8月30日に面接選考を行い、就農意欲が高く、他の条件も問題ないことから合格となり、来年度から研修を受けることとなった。

当地域では、研修農場の他にも6名のあすなろ農業塾長の登録があり、より多くの研修生受け入れが可能なことから、9月14日には名古屋市で行われたぎふ農林業チャレンジフェアにも出展した。9名がブースを訪れ、JAと連携し東美濃地域や夏秋トマトの魅力を説明した。

参加者からは、「研修農場の内容や支援制度の詳しい話が聞けて良かった。候補地の一つとして考えたい」との声が聞かれた。

農業普及課では、今後も新規栽培者を増やすため、関係機関と連携した支援を続けていく。



【名古屋でのフェア出展状況】

## 売れるブランドづくり

### 西濃農林■きゅうり **胡瓜生産組織で初の岐阜県GAPを取得！**

J Aにしみの海津胡瓜部会は、9月6日付で岐阜県GAP認証を取得した。キュウリでの岐阜県GAP取得は、生産組合としては県内初となり、今後販売先との信頼関係強化につなげていきたいと考えている。9月12日には同部会の役員がJ A本店及び市場を訪問し、岐阜県GAPの取得を報告した。

農業普及課は、研修会での情報提供、ほ場及び作業場の内部点検及び団体管理に係る支援を行った。



【農場審査の様子】

### 揖斐農林■米、麦良質種子生産指導 **大野町米麦採種圃生産組合栽培研修会**

大野町米麦採種圃生産組合は水稻ハツシモの一般種子と小麦イワイノダイチの原種、一般種子の生産を行っている。普及課は9月25日に現地にて水稻ハツシモの糊熟期審査を実施した。審査では生産者立ち合いで種子審査員（普及課等県職員）と、J Aいび川、J A全農岐阜、(一社)岐阜県米麦改良協会の種子審査補助員が異株、病害等の発生状況を確認し指導した。

翌9月26日には組合による種子生産研修会が開催され、普及課は水稻、小麦の良質種子生産について栽培指導を行った。



【ハツシモ糊熟期審査】

### 中濃農林■中濃地域就農支援協議会 **「新規就農者等集合研修」内容検討会議を開催**

J Aめぐみの、中濃管内の3農業普及課等が講師となり、新規就農者、営農研修者らを対象に「集合研修」を実施している。

9月18日、受講者に対してより有意義な講座となるよう、これから冬季まで計12講座の持ち方・講義内容等について、既に開催した講座に対する受講者アンケートなどを基に協議した。その結果、今後の研修では、肥培管理・植物生理などの栽培に直結する内容のほか、青果物流通・鳥獣害対策・税務管理・GAP制度など農業経営を進めるうえで必要となる項目を網羅し、解説していくこととした。

農業普及課では、鳥獣害対策、GAP制度、先駆的農家による講義を担当した。今後も、受講者が営農を実践するにあたっての知見・知識を深められるよう支援していく。



【打ち合わせ会議の様子】

### 可茂農林■花 **ファンシーマリエ秋出荷始まる**

東白川村の切り花生産者が切り花用フランネルフラワー「ファンシーマリエ」栽培に取り組んで3年目になり、9月上旬から今年度の秋出荷が始まった。革新支援専門員、農業技術センター研究員の栽培指導も受けて、市場に求められる切り花長が確保され、また、花付きが良いものが収穫出荷できており、市場の評価は非常に高くなっている。

また、夏期の高温対策のため一部試験導入しているドライミストの効果により、切り花長が約5cm長くなり、その効果が確認できた。

現在、1回あたり1,500本程度の出荷を週3回行っており、秋の出荷は10月下旬まで続く。今後、出荷量の平準化のため、秋の出荷の後も収穫期を一部遅らせ、11～1月の出荷も検討する予定である。

農業普及課では、生育調査を行っていくとともに、生産者の適期栽培管理を支援していく。



【収穫直前のハウス内】

## 東濃農林 ■ GAP 岐阜県 GAP 確認制度の推進

多治見市でもみじ葉の加工を行う法人が岐阜県GAPの認証取得を目指しており、農業普及課では9月19日に今後の進め方について打ち合わせを行った。これまでも、農業普及課で当法人のGAPの取り組み状況について確認と改善指導を行うなど、体制整備に向けた支援を行ってきた。

岐阜県GAPの新規での認定申請は今年度が最後となるため、打ち合わせの結果、最終審査となる12月の認定申請を目指し作業環境等の改善を進めていくこととした。また、認定申請に向け、県事業「GAPチャレンジ支援事業」の活用を提案し、現状実施できていないGAPの取り組みについて改善策を検討し、体制を整えることとした。

農業普及課では、岐阜県GAP確認制度の取得に向けた支援を継続していく。



【もみじの収穫作業】

## 下呂農林 ■ 夏秋トマト 「中間目揃え会」が開催される

9月12日、下呂市内において、下呂市蔬菜出荷組合トマト部会主催による中間目揃え会が開催され、部会員をはじめ市場、JA全農岐阜、JAひだ担当者等約70名が出席した。

当日は、JA全農岐阜担当者から、梅雨明けの遅れや低温傾向により前年同時期より出荷量が下回り、その後8月上旬以降は猛暑により前年を大きく上回っている出荷状況や、この影響で市場価格が低迷し、部会の目標単価を大きく下回っている状況が報告された後、農業普及課、JA担当者から情報提供等を行った。

農業普及課からは摘心作業を既に終了した生産者が多く、価格がほぼ平年並みに回復傾向にある市場への今後の出荷に向けて、現在着果している果実の確実な収穫・出荷を意識づけたとともに、栽培管理の重要性やそのポイント等を説明した。

その後の意見交換では、低迷する市場価格の中で新規就農者の厳しい経営状況を訴える声も出る中、出荷が集中した8月上旬は収穫作業に追われたため、受粉処理や誘引等の通常管理が間に合わず、新規就農者を中心に栽培期間後半の安定した出荷量が見込めない状況となっていることも課題となっている。来年度に向けては、7月下旬から8月上旬の集中出荷を避け、余裕のある作業体系により生育後半の着果の安定を図るため、その具体的な改善方策の早急な検討、提案が求められている。

農業普及課では下呂市産トマトの安定生産・安定出荷に向け、今後もJAとの密接な連携のもと、より一層の支援を継続する。



【目揃え会の様子】

## 飛騨農林 ■ ほうれんそう 産地基盤強化プロジェクトチーム本部委員会開催

近年、生産者の高齢化や雇用不足等により、ほうれんそうの栽培面積・出荷量は減少している。このような状況の中、今年度、生産者、関係機関（JA、市、県）が一体となり「飛騨ほうれんそう産地基盤強化プロジェクトチーム」を設置し、労力確保・担い手関係、作業受託・共同化、機械化・省力化の課題別に検討することとした。8月23日（金）には本部委員会を開催し、ほうれんそうの調製作業を外委託している他県の事例や、軟弱野菜調製機の現地への導入状況等について情報共有した。

農業普及課では、プロジェクトチーム活動の一環として随時、情報収集・調査を進め、飛騨ほうれんそう産地の基盤強化につながる対応策を提案していく。



【軟弱野菜調製機の現地調査】

## 革新支援センター■耕畜連携 稲WCS用新品種「つきことか」の適応性調査を進めています

稲ホールクロップサイレージ（稲WCS）については、籾の少ない極短穂品種の利用が牛用飼料として好まれ普及が進んでいる。今年度は、新品種である極晩生品種の「つきことか」を中津川市で試験的に栽培し、本県での適応性について調査を進めている。

「つきことか」は、晩生品種の「つきすずか」に比べて出穂が3週間程度遅い9月下旬であることから、収穫作業の分散や、稈長が長いことによりさらなる増収が見込める品種として期待されている。

農業革新支援専門員は、畜産研究所と連携しながら本品種の収量調査や飼料評価について検討を行っていく。



【つきことかの草姿】